

令和7年度  
入学試験問題

国  
語

(50分)

注 意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力高等学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

一 次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、生徒会の内諾を得た。
- 2、棧道を進んで目的地に至った。
- 3、醜聞が報道される。
- 4、役職を罷免になる。
- 5、欠席を喝破されてしまった。
- 6、シェークスピアのシヨウヤクを読む。
- 7、学年クツシの論客と言われる。
- 8、シサに富む講演であった。
- 9、農家のノキサキに大根が干してある。
- 10、本当にインケンなやり口だ。

二 次の――線の言葉が正しく使われているものは1、そうでないものは2として、それぞれ番号で答えなさい。

- ア、息子の入学式の日は、桜も満開の小春日和だった。
- イ、彼女の言動は背に腹は変えられぬひどいものであった。
- ウ、彼は社長として身の丈に合った経営を行っている。
- エ、リーダーシップが発揮出来ぬていたらかな彼女を皆が非難した。
- オ、この解答で丸をもらっては、級友の手前ばつが悪い。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

高校三年生になった岡崎乃里子は、ラグビー部の岩永健男と同じクラスになった。岩永の活躍によりラグビー部は全国大会で優勝しており、彼は多くの新聞や雑誌から取材を受けるような、弘明館高校の「スター」である。その岩永のわがままで席替えをクジ引きで行うことになったのだが、彼の引いたクジは、乃里子の隣りの席だった。

「なんだよお」

ややあつて彼は言った。

「こんなブスと隣りの席なのかよお、冗談じゃねえぜ。おい、小川君、悪いけど、オレだけでも一回クジ引きをしていいいら？」

「そんなことは許されません」

小川君は遠くの席から声をはりあげた。

「わかった、じゃ、誰かオレの席と取り替えっこしらざあ。岡崎の隣りだぜ。こりゃいいぜ」

気まずい沈黙が教室に流れ始めた。祐子が困ったような顔をして乃里子を見つめている。

① 目から熱いものが吹き出してきた。しかし、それよりも怒りが徐々に乃里子を支配し始めてきた。中学生の頃、葡萄酒で会って以来、好意とはいえないまでも懐しい感情をいつも乃里子は岩永に抱いてきたような気がする。他の女生徒たちが、岩永のことを口汚なくののしる時も、乃里子は言い添えることはしなかった。その岩永から、こんな裏切りをうけようとは、乃里子は思ってもみなかった。

「ちよつと、岩永君」

こうして人の目をはつきり見つめて物を喋るといふのは、乃里子の場合とても珍しい。自分の口が、熱い糸で操られているような気がする。

「あんた失礼だよ。私は今日、あんたのクラスメイトになったばかりで、あんたに対してなにも悪いことをしてないはずだよ。その私に、今みたいな言い方はないら？ バカ言うのも休み休みにしろし」

岩永は目を見張って、乃里子のタンカを聞いていた。弘明館のスターになってから、女生徒はもちろん、男生徒からもこうした言葉を聞くことはなかったはずだ。とまどう岩永の顔は急に幼く見え、その幼さは素直さとなって彼をうなずかせた。

「いめん」

意外なひと言がもれた。

「悪かったね、岡崎さん。オレ、ちょっと言いすぎたわ」  
拍子ぬけするほどあつげなく、岩永は自分の非を認めた。しかし、乃里子がつきにはそれを信用しなかったのは、彼の唇の端にまだ残っている微笑のせいだった。

「いいえ、私は許せない。こんな失礼なめに会って……」

「じゃ、こうすればいいなら」

乃里子の前に立ちふさがるようにしてあった、岩永の大きなからだが突然縮んだ。岩永は床の上に土下座したのである。

「岡崎さん、ごめんなさい。オレが悪うございました」

クラス中の者が息を呑んで見つめていた。乃里子はうろたえた。こんなことまでは要求しなかったのだ。しかも、岩永のやり方は芝居がかりすぎている。皆の目を意識しすぎている。多少の **A** はよぎったものの、激しい **B** が乃里子の胸におし寄せてきた。そして乃里子は少々、  
② ( ) に乗りすぎたのである。

「私はまだ許さないわよ。あんたはすごくひどいことを言っただから……」

こんな場面をどこかで見ることがあったつけ、と乃里子は思った。そうそう「赤毛のアン」の中で、アンとギルバートがケンカをする時のシーンのようだ。乃里子は満ちたりた思いの中に、 **C** さえしのびよってくるのを感じた。

「許さないわ。絶対に……」

③ あと一回、岩永があやまつたら許してやろう。乃里子がそのために語調をどう変えようかと思案し始めた時だ。岩永が不意に顔を上げた。微笑は消えている。その代わり彼の表情にあったものは、乃里子が初めて見るような怒りであった。

「馬鹿にすんなよ」

岩永は立ち上がりながら言った。膝を大きな音をたててはたいた。

「男が手をつけてあやまつてんじゃねえかよ。それを今の言い方はねえだろ」

恐怖が乃里子を襲った。岩永の目は、苦しそうにも、痛そうにもみえた。グラウンドを走る時と同じ目だった。校庭の隅から隅まで全力疾走した後、荒い息をしながらよく岩永はこんな表情をしていた。

「オレはお前とこれから絶対に口をきかんど。卒業するまでだ。オレがきかんっていったら絶対にきかん。オレのやり方をよく見とけよ」  
岩永はそう言うのと、再び小川君の方へ顔を向けた。

「おい、十八番の席、どこだよ」

「( )……」

小川君は窓ぎわから二列目の席をさした。ドスドスと床を踏みならすように岩永は歩いて行った。そしてどつかりと腰をおろした。それがきつかけのように、他の生徒たちも机や椅子の音をたてながら移動し始めた。

仕方なく乃里子もカバンを持って、席を移ることにした。もちろん岩永の隣りの席だ。彼は横顔を見せたまま、黙って黒板を見つめている。ふっと乃里子は涙がこぼれそうになった。

(中略)

席替えをしてから一か月、乃里子は岩永の意志の強さに<sup>④</sup>舌をまいていた。宣言したとおり、彼は全く乃里子と言葉をかわそうとしない。授業中だけおとなしく席にいますが、休み時間になろうものなら、すぐさま山口たちの方へ行ってしまう。最初の頃は、

「——じゃなか。な、おい」

などどとつさに乃里子にあいづちを求めようとした時もあったが、すぐに気づいて正面を見つめ、ひとり言にしてしまうのだ。

「あー、食った、食った」

<sup>⑤</sup>今日子の弁当も食べ終ると、岩永は大きな伸びをした。昼休みもこのへんになると、教室は急に静かになり始める。来年の受験をめざして、参考書を広げる生徒が多くなったのだ。

「お、みんな勉強し始めましたねえ」

岩永は誰にもなく声をかけたが、<sup>⑤</sup>クラスの誰もが本に熱中しているふりをしていた。山口たち<sup>生徒</sup>取りまき以外は、誰からもなく岩永を敬遠する風潮が出てきていた。私立文科系のこのクラスは、女生徒も理科系に比べると多く、おとなしい男生徒が多い。はつきりと口に出してこそ言わないが、傍若無人に振るまう岩永のグループを苦々しく思っているはずだ。そんな気配をいち早く察したのか、岩永は今度もと乱暴な言葉を吐いた。

「ふん、こんな馬鹿クラス、勉強したって行けるところは知れてるに」

乃里子たちのクラスは、同じ文科系でも国立コースよりは成績の劣った生徒たちで構成されている。しかし、馬鹿クラス<sup>〃</sup>という暴言を口にするほど岩永の成績がいいわけではない。なにしろもともと中学時代は弘明館入学は無理だと言われていたのだ。このあいだの中間テストでも、順位は下から二、三十位だときいている。しかし、岩永はいま得意の絶頂にいる。早稲田をはじめとする有名大学が、こぞって彼に勧誘の手をさしおべているのだ。中には多額な奨学金を申し出たところもいくつもあるらしい。

「多分よオ、オレがこのクラスの中で、絶対にいちばんいい大学に行くぜ。本当だぜ」

もう一度岩永は言った。それは山口に語りかけるといふかたちをとっていたが、クラス全員に聞かせようとしたに相違なかった。

D

昼下がりの教室の中、岩永の貧乏揺すりだけが、いつまでも聞こえていた。

(中略)

あの事件以後、岩永は宣言したとおり乃里子と言葉を交わさない。それは見事とやっていいほど、きっぱりとしたものだった。何か乃里子に言いたいことがあると、岩永は山口に話しかけるといふかたちをとった。

「おい、今度の週番日誌、先生のところへ持ってかなくてもいいすら」

それを聞いた乃里子は、今度はいちばん身近にいる女生徒に話しかける。

「そっだよねえ。もう日誌は提出することないんじゃない」

こんな不自然な関係を、一年近くも続けてきた。しかし、こんな会話をすることもまれになり、乃里子の岩永に接する機会は、ほとんどが観察者としての⑥それである。何度でも言うように決して魅かれていたのではない。けれども、自然と岩永の方へいつも視線は吸い寄せられていくのだ。

あれから何回か席替えがあつて、岩永は乃里子の斜め前に座っている。授業中でも、ふと気づくと、乃里子の意識と目は、ぴたっと岩永の背中に焦点を合わせている。

(中略)

あれはいつだっただろうか。不意に岩永が後ろを振り向いたのだ。誰かが英語のリーダー(生徒)を読んでいる時で、二人以外の生徒の視線は教科書の上にあつた。

「なんだよ」

とでも言いたげに、岩永はアゴをしゃくり上げた。それは乃里子の視線を感じて振り返ったことを証明していた。なかば開きかけた唇の端が、ほんのかすかに微笑ほほえんでいて、乃里子は思いもかけない彼の好意にとび上がるほど驚いた。その上、しばらく二人は見つめ合っていたと思う。それは確かに共犯者の目からませ方だったはずだ。ウヌボレに聞こえるから、乃里子は誰にも言ったことはないのだが、岩永は乃里子のことを認めているのだ。自分のことを誰よりも理解している者として、とうに気づいているのだ。そうでなければあんな目をすることはできない。

卒業式まであと二か月ちよつと、それまでに きつと岩永と自分は別れの言葉を、親しみを込めて言うに違いないと乃里子は考えたりもする。

(林真理子「葡萄が目にしみる」より)

(注1) 「小川君」……………乃里子と岩永のクラスメイト。学級委員長として席替えのクジ引きを行った。

(注2) 「祐子」……………乃里子と岩永のクラスメイト。乃里子の親友。

(注3) 「中学生の頃、葡萄畑で会って以来」……………葡萄農家の娘である乃里子が畑で手伝いをしていたとき、一緒に作業をしていた従妹いとこの葉子ようこと同じ中学の岩永に初めて会っている。その時、乃里子は自分のことをじつと見つめていた岩永をもっと知りたいと思い、彼がスポーツ推薦で入学することが決まっていた高校に志望校を変更した。

(注4) 「タンカ」……………けんかや口論の際に、勢いよくまくしたてる歯切れのよい言葉。

(注5) 「今日子の弁当」……………乃里子と岩永のクラスメイトで皆のあこがれの存在である今日子から、岩永はよくお弁当を分けてもらっていた。

(注6) 「取りまき」……………権力者につきまといつて機嫌をとる人たち。

(注7) 「英語のリーダー」……………英語の教科書。

問 一、——線①「目から熱いものが吹き出してきそうだ」とありますが、これと同じ乃里子の様子が描かれているのはどこですか。文章中から一文で探し、最初の三字を抜き出して答えなさい。

問 二、

A
---

C
---

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

- ア、不安      イ、後悔      ウ、甘い酔い      エ、満足感

問 三、——線②「（ ）に乗り」とありますが、この部分が「調子に乗り」という意味になるよう、（ ）内にあてはまる言葉を漢字一字で考えて答えなさい。

問 四、——線③「あと一回、岩永があやまつたら許してやろう」とありますが、乃里子が岩永を最初の謝罪で許さなかったのはなぜですか。文章中の内容をふまえ、「微笑」という言葉を使って四十字以内で答えなさい。

問 五、——線④「舌をまいて」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、困惑して                   イ、呆然として                   ウ、憂慮して                   エ、驚嘆して

問 六、——線⑤「クラスの誰もが本に熱中しているふりをしていた」とありますが、それはなぜですか。その理由を「くから。」に続くように文章中から四十四字で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

問 七、Dにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、ひそひそ話が飛び交う  
イ、しんと静まりかえった  
ウ、一瞬でざわつきはじめた  
エ、誰もが本に熱中している

問 八、——線⑥「それ」とは何を指し示していますか。文章中から二字で探し、抜き出して答えなさい。



問九、次の会話文は、生徒たちが——線X・Y・Zについて考えたことを述べているものです。これを読んで、あとの各問いに答えなさい。

生徒A——この小説が発表されたのは一九八六年だから今から四十年近くも前なのに、色あせていないというか……。登場人物たちがすぐ目の前にいて会話をしているような、そんな作品だったなあ。

生徒B——私は、自分も小説の中の登場人物になったような感覚で、最後まで一気に読んじゃった。それって、登場人物それぞれの心情が、とても丁寧に表現されていたからだと思うんだよね。

生徒C——その感覚、私もあったよ。そこにいる人物がどんな思いを抱いているのかが想像しやすかった。たとえば、——線X「自分の口が、熱い糸で操られているような気がする」は、Iってことが分かるよね。

生徒A——うん。それで、高校三年生の最初の日に、最悪の関係がスタートするわけだけど、——線Y「自然と岩永の方へいつも視線は吸い寄せられていくのだ」とあるように、不思議と乃里子は岩永を嫌ってはいない。それは、岩永に対するIIが乃里子の胸の中にあつたからじゃないのかな。

生徒B——そう、この二人の関係を言葉にするのはすごく難しい。席替えのときから関係はほとんど変わっていないのに、卒業を二か月後に控えたところで、——線Z「きっと岩永と自分は別れの言葉を、親しみを込めて言うに違いない」と乃里子は考えたりもする」なんて……。これってつまり、IIIということでしょう？

生徒C——そういうことなんだろうね。

1、Iにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、普段の乃里子とは異なる様子であることが強調されていて、乃里子自身が意思をもって話しているというより、感情が高ぶって自分でも思いもよらない態度をとっていたんだな

イ、普段の乃里子からは想像できない態度であることが強調されていて、乃里子一人の力ではどうにもできなかったことが、周りの雰囲気の後押しされてできるようになったんだな

ウ、普段はおとなしい乃里子が理想としていた接し方であることが強調されていて、乃里子自身もまったく気づかないうちに、岩永の挑発的な態度によって行動させられていたんだな

エ、乃里子が勇気をふりしぼって自分の思いを率直に伝えたことが強調されていて、普段のおだやかな乃里子からは想像もつかないような力が、この時ばかりは発揮できたんだな

2、IIにあてはまる言葉を文章中から十六字で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

3、IIIにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、岩永は誰よりも乃里子のことを理解してくれているが、それがウヌボレでないと証明したいという思いが乃里子にはある

イ、岩永は誰よりも乃里子のことを理解してくれているし、それを以前から認めているという自覚が乃里子自身にもある

ウ、乃里子は誰よりも岩永のことを理解しているが、それを岩永にはつきりと伝えたいという思いが乃里子にはある

エ、乃里子は誰よりも岩永のことを理解しているし、岩永もそれを認めてくれるという確信が乃里子にはある

④ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、一部省略した箇所があります。

メタファーとはかんたんにいえば見立てであって、ある対象を何か別のものに見立てて表現することである。

目玉焼きは、卵をかきまぜずにフライパンで焼いたもので、黄身が目玉に見えるから、その名前がついている。

①メタファーとして有名で、よくできていると思わせるのは、コンピュータにおける「ウイルス」という言葉だろう。プログラムをうまくつくることによって、プログラムに自分自身でコピーをつくらせ（自己増殖）、他のプログラムにうまくとりついていかせることができる。つまり、他のプログラムの適当なところうまく自動的に挿入されてはたらくプログラムをつくることができる。このようなプログラムをウイルスと称し、またこのようなプログラムにとりつかれたプログラムは、ウイルスに感染したという。

ウイルス・プログラムは、ある潜伏期間を経て自動的に動きだしたり、またウイルスに感染したプログラムが作動したときにいっしょに動きだす。ウイルス・プログラムは自己増殖して、ネットワークで結合された他のコンピュータのプログラムにつきつぎと感染していくので、あたかも微生物のウイルスのように見えるところからこの名前がつけられた。

ウイルス・プログラムはさまざまのいたずらをしたり、ファイルを破壊したり、有害なことをするので、ウイルスに感染しないように、コンピュータのとりあつかいには注意が必要である。（中略）ウイルスが深刻な問題となるにつれて、ウイルスを感知して感染を防ぐためのプログラムも開発されている。これをワクチン・プログラムといっているが、いろいろな新しいウイルス・プログラムがつくられるので、ワクチンがきかないことが多く、後手後手にまわっているのが現状である。

この記述からもわかるように、この種の問題はコンピュータ・プログラムの世界における技術用語を用いて状況を説明するよりも、人体に感染するインフルエンザなどのウイルスと、それを退治するワクチンという概念を借りてきて説明するほうが、Aよく人々にわかってもらえるのである。

分子・原子のモデルもかなり比喩的なものである。今日の素粒子論においては、ひじょうに多くの比喩的イメージを用いて、説明がおこなわれている。これはたぶん、B目に見えず、量子力学の式の形だけではなかなか実体的イメージがわいてこないからであろうと思われる。

陽子、中性子やパイ中間子などを構成する基本粒子はクォークと呼ばれているが、このクォークの相互作用に関する理論は量子色力学と呼ばれ、赤・青・緑と呼ばれる三つの色の自由度によって説明されている。そしてクォークの種類は香りと呼ばれている。また、重力を含んだ力の統一理論においては、張力をもつ一次的なひろがりの弦と称する概念を基本として、その振動や相互作用というイメージによって説明がおこなわれる。

このように、極微の世界のことについても、人間は②具体的イメージをもたねば、その世界をくわしく調べ、学問を発展させていくことはむず

かしいのである。したがって、目に見えない世界を、多くの人がえがくことのできるイメージの世界にマッピングして説明することは、ものごとの理解にとってひじょうに大切である。ただ、このときのイメージと学問の世界での概念、言葉によるその説明との関係には十分な注意を向ける必要がある。

たとえば、未知の町へ行って、目的の建物への道を聞いたとき、何度説明を聞いても、十分にはわからないということが多いだろう。それは説明が十分でなく、また正確でないからであろうが、<sup>③</sup>言葉による説明には明らかに限界があるのである。その町の地図を見せてもらって、現在いる場所と目的の建物の場所をしめしてもらえば、言葉による説明がなくても十分にわかることが多い。

これをもっと敷衍するならば、「ゴルフのスイングを柔らかくおこなう」ということは、言葉でいくら説明してもわからないのであって、体験してみてもじめてわかるのである。同様に、学校教育において、生徒の実験がいかに大切であるかはいうまでもない。本書は「説明によってわかる」ということの過程について議論しているので、イメージや体験によってわかるという場合についてはこれ以上議論しなくておくが、哲学的にもっと掘り下げて考察すべき大切なことである。

メタファーの説明はたしかにわかりやすいが、注意していないと、その範囲をひろげすぎて、じつさいにはメタファーが成り立たないことについてまでも、あたかも成り立っているかのごとき印象を与えられ、大きな誤解をしてしまうことがある。

ウイルスを退治するためのワクチンは、そのウイルスをうまく培養してつくられるが、それではコンピュータ・ウイルスを退治するためのワクチン・プログラムは、ウイルス・プログラムを培養して（うまく変形して？）つくられるかという、けっしてそうではない。ウイルスの構造と機能を十分分析したうえで、対抗できるプログラムを新たにつくらねばならないのである。

<sup>④</sup>メタファーとは少しちがうが、つぎのような説明のしかたにも注意が必要である。

キリンは、高いところにある木の葉も食べられるよう、首が長くなるように進化した

栗は、動物に食べられないように、鋭いとげのついたがに包まれている

このような説明は、進化に関する一般的な解説書などでよく出会う表現である。もっともらしく聞こえるが、C学問的に正しい説明であるうか。

キリンだけでなく、木の葉を食べる動物はすべて首が長くなってよいのに、なぜキリンだけが首が長いのか。栗だけでなく、すべての木の実は鋭いとげのいがに包まれているもよさそうなものなのに、なぜそうではないのか、といった疑問が出てくる。

進化という言葉のもつイメージから、生物はD少しずつ進歩してきたように聞こえるが、ほんとうにそうなのだろうか。生物が地球上にあらわれたとされる三五億年前から今日までのあいだに、遺伝子の交配、突然変異などで無数の新しい種類の生物が発生したであろうが、いろいろな環境条件によって淘汰・選別（注）されるという過程がつついてきて、きびしい環境に耐えられるものだけが残って、現在私たちが見るような生物が

存在しているのではないだろうか。

麒麟の先祖が、首が長くなるように努力した結果、そうなったのではないのか。動物や植物にあたかも意志があつて、努力して自己改革してきたような錯覚を与える説明をみかけることがある。私たちにとつてわかりやすいが、<sup>⑤</sup>自然というものはそんなものではあるまい。

(長尾 真「『わかる』とは何か」より)

(注1) 「敷衍」……例などを挙げて分かりやすく説明すること。

(注2) 「淘汰」……生存競争によって環境に適応しない個体が死滅し、適応するものだけが残るということ。

問一、——線①「メタファーとして有名で、よくできていると思わせるのは、コンピュータにおける『ウイルス』という言葉だろう」とありますが、その理由としてどのような点を挙げていますか。「〓点。」に続くように文章中から二十字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問二、

A
---

〓

D
---

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、いかにも      イ、ひたすらに      ウ、まったく      エ、まさか      オ、はたして      カ、はるかに

問三、——線②「具体的イメージ」とありますが、「極微の世界」の説明に用いられる「イメージ」として挙げられているものは何ですか。あてはまる言葉を次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア、陽子      イ、中性子      ウ、パイ中間子      エ、クォーク      オ、色      カ、香り      キ、弦

問四、——線③「言葉による説明には明らかに限界がある」とありますが、その限界を打破するものとして筆者が挙げているものは何ですか。

——線③以降の文章中から七字で探し、抜き出して答えなさい。

問 五、——線④「メタファーとは少しちがうが、つぎのような説明のしかたにも注意が必要である」とありますが、「注意が必要」な「説明」の例として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、アフリカゾウは芸術品として価値の高い牙を狙った人間たちの密猟から逃れるため、牙を捨てるメスの個体がしだいに多くなってきた。  
イ、クマは山林の減少に伴って餌を確保しづらくなったため、より人里に近い区域に活動範囲を変えることによって餌を得るようになった。  
ウ、ペンギンは鳥の天敵のいない南極で生きる中で飛ぶ能力を捨てたが、極寒の世界で水中の生き物を餌にできるように泳ぐ能力を手に入れた。

エ、花は風よりも効率的に受粉を助けてくれる昆虫を引き寄せるため、人間が見ても美しいと感じる鮮やかな色や特有の形を持つようになった。

問 六、——線⑤「自然というものはそんなものではあるまい」について、次の各問いに答えなさい。

1、「そんなもの」とはどのようなものですか。「〜もの。」に続くように文章中から三十五字以内で探し、最初と最後の三字を抜き出して答えなさい。

2、筆者は、「自然」の「進化」の仕組みをどのように考えていますか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、文章中の言葉を使って五十字以内で答えなさい。

長い年月をかけて、

五十字以内

現在残っている。

問七、この文章の内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、「ウイルス・プログラム」や「ワクチン・プログラム」といったメタファーを用いた呼び方はわかりやすいが、現実の作成プロセスにおいては、いずれもメタファーの理論が成立していない。

イ、進化という言葉のもつイメージは、生物学の解釈に誤解を与えかねないものであり、長年の種の努力の過程を正しく説明することを妨げる大きな要因となっているので、注意が必要である。

ウ、メタファーの説明によってもたらされるイメージと学問的真実との関係は必ずしも完全に一致するものばかりではないが、まずはイメージによって全体像をつかむことを優先する必要がある。

エ、メタファーを用いた表現による説明は、一見わかりやすくてもそれが実際の学問上の概念や理論を適切に表現しているかについては十分とは言えない場合もあるので、注意が必要である。

五 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

必ず歌を詠み、物語を撰えらび、色（注1）を好むのみやは、いみじくめでたかるべき。何事にも、歌の道に足りぬるばかりは、いみじくめでたかるべきことやははべる。その中にも箏（注2）の琴は、女のしわざとおぼえて、なつかしくあはれるものの音ねなれど、あやし（注4）の生女房、童わらわべ、侍まがらひなどまで、大方よからぬ爪鳴らしして、なべて耳慣らしたるが、<sup>①</sup>いと口惜（注5）しきなり。琵琶びははなべて弾く人少（注6）なう、まして女などは、たまたままねぶを聞くもいとめでたく、心にくく、奥ゆかしくこそはべれ。

博雅はくがのさんみ三位、逢坂の関へ百夜詣ももよまで行きて、蟬丸せままるが手より習ひ伝へたまへりけむほど、思ふもいとありがたくめでたきを、兵衛内侍ひやうゑのななしといひける琵琶弾き、村上（注7）の御時の相撲（注8）の節せちに、玄上（注9）賜はりて<sup>②</sup>仕まつりたりけるが、陽明門まで聞こえけるなどこそ、いとめでたけれ。<sup>③</sup>博雅三位（注6）だにかばかりの音は弾きたてたまはず」と、時の人褒ほめはべりけるほどこそ、女の身にはありがたきことにはべれ。

歌などを詠み、すぐれて、人に褒めらるるためしは、昔も今もいと多かり。<sup>④</sup>これは、いとありがたくうらやましきことにはべり。

〔無名草子〕より

〔注1〕「色を好むのみやは、いみじくめでたかるべき」……「情趣を好むのだけが素晴らしく結構だというわけではないでしょう」の意。

〔注2〕「女のしわざ」……「女のたしなむ楽器」の意。

〔注3〕「なつかしく」……「親しみ深く」の意。

〔注4〕「あやしの生女房」……「身分の低い新米女房」の意。

〔注5〕「なべて」……「一般に」の意。

〔注6〕「まねぶ」……「習う」の意。

〔注7〕「村上の御時」……「村上天皇の御代」の意。

〔注8〕「相撲の節」……「宮中の年中行事の一つ」。

〔注9〕「玄上」……「宮中に伝えられた琵琶の楽器」。

〔注10〕「仕まつりたりけるが」……「お弾き申し上げたその音色が」の意。



問 一、——線①「いと口惜しきなり」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、和歌も十分に習得していない状態で琴を練習するのは、学ぶ順序が逆であるから。
- イ、たいした腕前でもないのに、誰でも気安く琴を弾くようになってきているから。
- ウ、琴が似つかわしくない男性や子どものほうが、演奏が上達してきているから。
- エ、楽器をたしなむ人の中で、琵琶を習う人は琴に比べてずいぶんと少ないから。

問 二、——線②「仕まつりたりける」の主語として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、博雅三位      イ、蝉丸      ウ、兵衛内侍      エ、村上天皇

問 三、——線③「博雅三位だにかばかりの音は弾きたてたまはず」の解釈として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、博雅三位が弾いたとしても、これほどの素晴らしい音色はお出しにならなかった。
- イ、博雅三位とともに弾くのでなかったら、これほど見事な演奏にならなかった。
- ウ、博雅三位が指導したのでなければ、これほど優雅な演奏はおできになれなかった。
- エ、博雅三位から譲り受けた琵琶でなくては、これほど美しい音色は出せなかった。

問 四、——線④「これ」とはどのようなことを指していますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、琵琶を上手に弾いて褒められること。
- イ、すぐれた和歌を詠んで有名になること。
- ウ、歌でも楽器でもその道の名人に習うこと。
- エ、身分や性別を問わず多くの人が芸の道に精進すること。

問 五、この文章の内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、兵衛内侍は博雅三位とともに蟬丸に琵琶の手ほどきを受け、競い合いながら鍛錬をした。
- イ、博雅三位が相撲の節で奏でた琵琶の音色は、兵衛内侍ほど素晴らしいとは言えなかった。
- ウ、琵琶の道では博雅三位が名高いが、兵衛内侍という名手も現れて世間から高い評判を得た。
- エ、和歌や琴の道では、琵琶で名高い兵衛内侍のように優れた才能をみせる女性は珍しかった。

五					四					三					二					一														
五	四	三	二	一	七	六	五	四	三	九	八	七	六	五	四	三	二	一	オ	エ	ウ	イ	ア	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
						2	1			3	2	1					C	B	A															

(受験生はこれより上段には記入しないこと)

五	問一 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問七 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問六 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問三 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問二 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問一 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問九 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問五 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問四 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問一 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問二 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問一 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問二 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問三 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問四 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問五 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問六 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問七 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問八 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問九 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

  

五	問一 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問二 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問三 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問四 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問五 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>
---	---	---	---	---	---

  

四	問一 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問二 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問三 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問四 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問五 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>
---	---	---	---	---	---

  

三	問一 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問二 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	問三 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>
---	---	---	---

  

二	ア <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	イ <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	ウ <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	エ <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	オ <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>
---	--	--	--	--	--

  

一	6 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	1 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	7 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	2 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	8 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	3 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	9 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	4 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	10 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>	5 <input style="width: 100%; height: 30px;" type="text"/>
---	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--

令和7年度  
高等学校入学試験問題  
〔国語〕  
解答用紙 (二月十三日)

注意事項  
・解答は解答欄の枠内に濃くはつきりと記入して下さい。  
・解答欄以外の部分には何も書かないで下さい。

氏名

受験番号

0	0	0	0
1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9

評価点